



HACK

14

狂気

KAI SHIGIHARA



14 脱出

ケビンが異変に気がついたのは、逮捕状を持って再びやって来たレイノックス警察に対し、ドアが勝手に開いた時だった。

「まさか！」

だが、目の前のモニターには、勝手に開いたドアから、大勢の警官が次々入ってくる映像が映っている。

「ど、どうなっている」

自分の研究室にいたケビンは、すぐに端末に取りついて、警備システムを呼びだした。モニターには、すぐに、警備状況をモニターできるいつもの画面が表示された。その画面の中で、正面入り口は勿論、更に奥へと続くドアも解錠されているのがわかった。よりもよって、こんな時に、誰のミスだとイラつきながら、ケビンは研究所内のドアを全てロックしようとした。だが、警備システムは、ケビンの命令を受付けなかった。

内線電話をとりあげ、オペレータールームに連絡しようとした。だが、内線電話は全く機能していなかった。どのボタンを押しても、うんともすんともいわない。

「まさか、まさかだろう」

じりっと、背中を冷や汗が落ちていく。

天才と呼ばれる、この自分のシステムをハッキングしている奴がいるというのか。一体、誰が、いつの間に、どうやって。

だが、研究所などどうなっても構わない。また、最初から作ればいいのだ。ケビンに金を出す企業はいくらでもいる。

それよりも、大切なのはレスリーだ。彼女は、何物にも代えがたい。

モニターに、レスリーがいる部屋の様子を写そうとしたが、やはりケビンの命令は無視された。それなら、直接出向くと、ケビンは自室を出ようとしたが、自動で開くはずのドアは、びくともしなくなっていた。閉じ込められたのだ。

「誰だかしらないが、僕に喧嘩を売ろうなんて、いい度胸じゃないか」

ケビンは車椅子を操作し、デスクの前に戻ると、引き出しから拳銃をとりだす。そして、部屋の隅っこに設置してある警備用のカメラを打ち壊した。こうなると、カメラの映像だって、ハッカーは利用しているのに間違いない。こちらの様子をわざわざ教えてやる必要もないのだ。

「見てろよ」

引き出しの奥から、フラッシュメモリーを一つかみ取り出す。システムがハッキングされたと

きに備えて、半ば冗談半分に用意してあったワクチンやウィルスの類。まさか本当にハッキングされる日が来るとは思っていなかったが、これがあれば短い時間で有効な反撃が打てる。

「後悔させてやる」

レイノックス警察と、ドミニク率いる第一中隊は、ケビンとレスリーの捜索に二手に別れていた。レイノックス警察の有能だけど若くてお堅い警察官はかなり渋ったが、ドミニクに上手く丸めこまれ、ドミニクは軍だけの単独行動権利をゲットした。

ケビンのいる彼の研究室はレイノックスに任せ、ドミニクはレスリーが潜んでいるという、モニタールームへと向かっていた。勿論、ジュリアスからの指示だ。一応、ドミニク以下隊員たちは、マッドサイエンティストの研究所ということで緊張してきたのだが、今のところドアはほとんど開くし、罠があったりするわけでもなく、あっけないほど順調に進んでいた。

「これ、俺達が来る意味、ありますかね」

誰かが、ぼそりとつぶやいた。気持ちはわかると、ドミニクが苦笑して振り返ったとき、最初の異変が始まった。

「緊急事態発生、緊急事態発生、コードR、コードR」

突然、天井にあるスピーカーから、けたたましいサイレンの音と一緒に、そんなアナウンスが流れ始めた。

廊下の真ん中を歩いていたドミニクたちは、さっと廊下の隅によると、壁を背中にして注意深く周囲を見まわす。サイレンが鳴り響き、機械の合成音的なアナウンスが鳴り響く以外、変わったことはない。そのサイレンとアナウンスも、始まった時同様、不意に消えた。

「隊長」

隣にいた部下に脇をつつかれ、ドミニクは部下の視線を追って、右前方の壁に埋め込まれているモニターに視線を向けた。

研究所内の案内やお知らせを表示させておくためだろうモニターに、今は「ドミニク」と表示されていた。

「……ジュリか？」

つぶやくと、それが聞こえているように、モニターにはまた文字が表示される。

『ごめん、油断した。隙をつかれて、全部ひっくり返された。』

「大丈夫なのか？」

『ちょっと時間がかかる。あいつ、自分のシステムを自爆させた。頭がおかしい。狂ってる。』

「今、どうなってる？」

『ケビンは閉じ込めておいた自室から脱出した。武装しているから気をつけて。警報はケビンが出した。コードRは、武装した侵入者あり。研究者はシェルターに避難、警備員は武装して侵入者を撃退せよ。レスリーはモニタールームにいる。だけど、もしかしたら、ケビンに居場所がばれたかも。移動させようと思う。』

「了解だ。どこに移動させる？」

『それがまだ決められない。俺が掌握しているのは、一部だけなんだ。全体が見えない。レスリ

ーがいるエリアについては、まだ何もわからない。急いでいるけど。』

「焦るな。レスリーは、俺が保護する。彼女には、俺が行くまで動くなと伝えてくれ。お前は掌握に集中しろ」

『ありがとう、ドニ』

と、表示されたと思った途端、モニターはブラックアウトした。

誰の目にも、今のはドミニクがコンピューターと会話しているように見えただろう。SF映画の世界だ。この場にいる中で、ただ一人、それが当たり前みたいな顔をしているのがドミニクで、部下たちはまじまじとドミニクの顔を見てしまった。

「呆けてるな、行くぞ」

研究所内の地図と、レスリーのいる場所については、事前にジュリアスから提供されている。レスリーが軟禁されているのは、研究所の最上階五階。五階には、ケビンのごく個人的な研究の設備やプライベートで使っている部屋ばかりで、一般の研究員が上がってくることは滅多にない。

ケビンのメイン研究室は、三階。車椅子のケビンに、どれほどの移動能力があるかわからないが、一階にいるドミニクはかなり不利だ。

その時、ガコンと、何か大きな機械が動き出す音がした。何かと思えば、ドミニクたちがいる通路の先で、大きな防火シャッターが下がり始めていた。階段やエレベーターがあるエリアは、その先だ。ドミニクは全力で走りだした。

「隊長！」

後ろから部下達の声が聞こえてくる。彼等の足では絶対に間に合わない。ドミニクでも間に合うかどうか、微妙なタイミングだ。

この防火シャッターの下敷きになったら、間違いなく内蔵飛び出すなと思いつつ、最後は床を思い切りけって、ドミニクは防火シャッターの向こうへと滑りこんだ。ぎりぎりのタイミングだった。間一髪、ドミニクはひき肉になる運命から抜け出すことに成功した。

「隊長！ 無事っすか！」

がんがんとシャッターを叩きながら、部下たちが叫んでいる。

「無事だ！」

五秒ほど、床に寝そべって呼吸を整えると、ドミニクは元気よく立ちあがる。どこにも怪我はしていなかった。

「俺は先に五階に行く。お前ら、一度、外へ出て、別ルートから行け。気をつけろよ」

「了解しました！」

また防火シャッターをおろされてはたまらないので、ドミニクはすぐに走り出す。

非常階段に出る前に、エレベーターを確認すると、五階でとまっていた。ジュリアスがエレベーターを掌握しているのなら、エレベーターへの電力をカットしているはずだ。

あの防火シャッターといい、エレベーターといい、この周辺はケビンが掌握しているエリアなのかもしれない。

「間に合えよ、俺っ」

そう気合を入れると、ドミニクは階段を驚異的なスピードで駆け上がっていった。

だが、五階に到着したドミニクを待ちうけていたのは、またもや防火シャッターだった。嫌な予感がして、階段を四階に降りると、四階も防火シャッター、三階二階も同じだった。ドミニクはエレベーター階段エリアに、閉じ込められてしまったのだ。

「マジか」

ジュリアスが開けてくれるまで、ドミニクは足止めとなった。

時間は少しさかのぼる。

ジュリアスがひどいショックを受けたことを、レスリーは感じた。闇を照らしていた光の矢は、あっという間にその数を減らし、一時は真っ暗闇に戻ってしまったほどだ。何かあったのは確かで、それはきっとジュリアスがアクセスしているケビンのシステム内でだろうと思えた。そして、サイレンと警報まで流れ出し、レスリーは確信を強めた。

まずは武器を探したのだが、何もないモニタールームには、武器になるようなものもなにもなかった。だが、ケビンとの裁判前後、護身術をみっちり仕込まれている。銃だってちゃんと扱える。無暗に怖がることはないのだと、何度も自分に言い聞かせた。

(レスリー、ケビンに隙をつかれた)

ようやく、ジュリアスの声が聞こえてきた。ひどく焦っている感じだ。

(大丈夫?)

(大丈夫だけど、ちょっと時間がかかる。全部ひっくり返されたんだ)

(ケビンって、えげつないこと平気でやるから)

(狂ってるよ)

(ええ、狂ってる)

ジュリアス曰く、ケビンはジュリアスに爆竹を投げつけ、それにジュリアスが驚いた一瞬のすきに、ジュリアスに支配されたシステムを抹殺してしまったらしい。そのため、現在、研究所はとても不安定な状態にあるそうだ。なにしろ、病室で生命維持装置につながれていた人がいたらきっと死んでいると、ジュリアスが嘆くぐらいに、それはとんでもなく捨て身な行動だったらしい。自分さえよければ周囲はどうでもいい、ケビンらしい行動だ。

(いいかい、レスリー、そこは五階なんだ。一階まで下りられれば、ドミニクがいる。屋外に出れば、レイノックス警察とドミニクの部下が待機してる。レイの部下もいる。だが、廊下には武装した警備員がうろついている。今、俺は五階の監視カメラを掌握できていないんだ。だから、そこでじっとしてほしい)

(わかったわ)

ジュリアスがひどく焦っているのが、レスリーには感じられた。この状況では無理もないが、このままではケビンの思うつぼのような気がする。

(ジュリアスがパニックになったら、私もつられちゃうよ)

かちりと、ドアのロックが外れる音がした。

(そうだね。俺が落ち着かないと。レスリー?)

(ケビンが来た)

車椅子に乗ったケビンが、うすら笑いを口元に浮かべながら入ってきた。思っていたより、早い登場だと、頭の中の冷静な部分がそうつぶやく。

今度はばっちり目も見える。ケビンの右足のふくらはぎには、包帯が分厚く巻かれていた。それが、ドミニクに撃たれたというところだろう。まだ撃たれて二十四時間もたっていない。もしかしたら、発熱しているかもしれないし、足はかなり痛むだろう。麻酔をしているなら、痛みはないが動かせないはず。

(大丈夫。自分でまともに歩けない男に、私は負けない)

(ケビンは銃を持っている)

(わかった。あなたはシステムに集中して)

「こんなところに居たね、レスリー」

と、ケビンは車椅子を動かして近づいてくる。

もうそれほど怖くない。目には見えないけれど、そばにはジュリアスがいてくれる。屋内屋外には、味方がたくさん来てくれている。この場を切り抜けられれば、きっと助かると自分に言い聞かせ、冷静すぎるぐらい冷静になろうとつとめた。

「あの警報はどういうこと？ 何があったの？」

「侵入者さ。僕の邪魔をしようという輩は、消しても消してもわいてくる」

ケビンは端末の前までくると、モニターの電源を入れる。

「何をやるの？」

「僕のシステムに侵入しようとしている奴がいるんだ。追い払う」

ケビンはそうつぶやくと、キーボードに指を走らせる。モニターには、めまぐるしく数字や記号が流れるように表示される。上着のポケットから、ケビンはフラッシュメモリーを一本取り出すと、それをUSBコネクタに差し込んだ。

「何をやってるの？」

「とりあえず、邪魔者が近づけないようにね」

(閉ざされた)

(え?)

(扉全部。防火シャッターもおろされて、研究所内の全員が閉じ込められた)

ジュリアスのうめき声が聞こえてくるようだった。集中力が落ちてきているのも感じる。それは無理もないかもしれない。ジュリアスはケビンのシステムを攻略するのに時間と集中力を使った。すべて制圧して成功だと思った途端、全部ひっくり返されたのだ。体力的な問題だってあるだろう。

「これは何？」

と、レスリーは自然な仕草に見えるように演技しながら、ケビンのフラッシュメモリーに手を伸ばす。床に膝をつき、片手でフラッシュメモリーを、もう片手はCPUの入ったボックスの上に置く。あくまで、自然な動作で。

「それは、僕が開発したウィルスみたいなものさ」

ケ빈は昔から自慢するのが大好きだ。水を向ければ、いくらでも話してくれる。

「ハッカーに、逆にウィルスを送りこんでいるということ？」

「それじゃ当たり前すぎてつまらないな、レスリー。ハッカーは僕のシステムを乗っ取ろうと動いている。まあ、腕のいい奴だと認めてもいい。だが、俺はもっと上をいく。ハッカーにのっとられたシステムに対して、ウィルスを送るのさ。勿論、最初からシステムにはそのウィルスに反応するような種を隠してある。ウィルスを流し込むことにより、システムは暴走したようになり、ハッカーの制御下から離れ、僕の支配下に戻ってくるという仕組みなんだ。新しいだろ？」

「え、ええ、そうね」

(そうなの?)

(新しいね。だが、仕組みがわかればこっちのものだ。ウィルスを解明したから、システム内の種を探しだせる。ありがとう、レスリー)

ジュリアスに元気と集中力が戻ってきた。彼に意識を向ければ、また闇の中を走る光が増え始めている。

(きつとあともうちょっと。ジュリアス、頑張って)

「さあ、僕達はここを離れよう」

ケ빈はモニターからレスリーの方へと向き直ると、笑顔でそんなことを言いだした。

「離れる？ でも、どうやって？」

「屋上にヘリがある」

「でも、パイロットがいないわ」

「勿論、待機させているよ」

いつの間にと驚いたが、レイノックス警察がケ빈の逮捕にここを訪れた時から、島からの脱出は考えていたのだろう。

「ここを出て、どこに行くの？」

「そんなこと、君が心配しなくていい」

「でも、ケ빈。私は帰りたいの。帰りましょうよ。お父様の説得は、私も頑張るから」

「帰るのはもうちょっと先になりそうだ」

目の前に迫ったケ빈の手が、レスリーの手首をつかむ。その感触と体温に、レスリーは心の底からぞっとした。

「いやっ！」

咄嗟に、力いっぱい、ケ빈の手を振り払っていた。これはもう、生理的に受け入れられない。

「レスリー」

ぴくりと、ケ빈の眉が不快げに動き、眉間にしわが寄った。

「私はどこにも行かないわ」

「駄々をこねないでくれないか。人を呼ばなければならなくなる。僕だって、君には手荒な事をしたくないんだよ」

内線電話のほうへと向きかけたケビンを、レスリーは車椅子を動かさないように押さえることでとめた。

人を呼ばれて、また薬でも打たれたら身動きできなくなってしまう。きっと、あともう少し、ジュリアスが制圧するまで、あと少し、時間をかせがなければならない。

「ケビン、あなた、ジュリアスを撃ち殺したって、そう言ったわよね。本当なの？」

「君に付きまっていた男のことなら、その通りだよ」

「彼、近衛軍司令官の息子だって、知っているの？」

「……だからどうだと言うんだ」

ケビンは知っていたのだろう。そして、司令官の息子に発砲するということが、母国においてどれほどの罪になるのかだって、わかっている。

「きっと今頃、あなたへの逮捕状がでているわ。ジュリアスは伯爵家の子弟でもあるのよ。貴族に発砲するなんて、どれほど愚かな行為なのか、あなただってわかっているはず」

「……」

「あなたはきっと、死刑になるわ」

だって、ケビンは貴族ではないから。と、レスリーはあえて口にしなかった。口にしなくても、ケビンにはレスリーの言いたいことは分かっただろうし、その方が彼のコンプレックスを刺激するのに効果的だと、レスリーは考えたから。

「軍は絶対にあなただを逃さないでしょう。意地とプライドにかけて、司令官の息子を殺した犯人を追いつめるはずよ」

「黙るんだ、レスリー」

「レイノックスは、我が国の友好国よ。あなたを匿ってくれるとは思えない。どこに逃げるの？」

ただの時間稼ぎの雑談のつもりが、次第に本気で腹が立ってきた。ケビンがジュリアスに発砲したのは本当だし、いい加減、ケビンの自己中心的すぎる戯言に付き合うのが馬鹿馬鹿しくなってきたのだ。

「あなたとなんて、どこにも行かないわ。殺人犯として追われている人と一緒にいて、どうして幸せになれるっていうの？ あなたはもう、一生、貴族になんてなれないわ！」

顔を真っ赤にしたケビンが、レスリーに銃口をむけていた。

レスリーは咄嗟に、ケビンの車椅子を力いっぱい蹴り倒す。その勢いで引き金を引いてしまったのか、ガンという銃声が響いたが、レスリーは無傷だった。

「レスリー！」

車椅子ごと床に倒れたケビンは、それでも銃は握ったままで、無様な格好のままレスリーに再び銃口を向けようとしていた。

それを見たレスリーは、身をひるがえし、その部屋を飛び出した。

(レスリー、無事か?)

心配そうなジュリアスの声。

（無事よ。かすりもしてない。それより、今、すごく爽快な気分。ケビンを蹴飛ばしてやったわ！）

廊下を走りながら、心の中で万歳三唱する。ジュリアスは苦笑しているようだった。

（ごめんなさい、端末から離れて。別の端末を探すわ）

（もう大丈夫だ。多少離れても影響ないよ。あともう少しだから）

（わかった。頑張るって）

廊下を走っていると、その先が行きどまりになっているのが見えてきた。防火扉が降りているとジュリアスが言っていたが、それかもしれない。五階のフロアから出られないように、廊下は閉ざされているのだろう。

だが、その防火扉が、がんと音を立てているのがわかった。なにやら、人の声も聞こえてくる。レスリーはそのまま走り続け、防火扉の前に張り付いた。

「誰かいるの？」

「もしかして、レスリー？ ドミニクだ！」

「よかった！」

「無事なのか？ さっき、銃声が聞こえた」

「ええ、無事よ。でも、ケビンを怒らせたの。彼、銃を持っているわ」

「逃げた方がいい！ この扉はどうやっても開かないんだ。ジュリアスが開けてくれるまではね」

「ええ、でも、色々なところに防火扉がおりていて、どこも行き止まり。多分、五階から出られないようになってると思う」

それにもう、遅い。行き止まりの廊下の向こう、車椅子に乗ったケビンがこちらへと向かってきている。廊下はまっすぐで障害物がないため、まだかなり距離はあるが、はっきりとケビンが見えた。そして、ケビンにも見えている。逃げ場のない袋小路の終点で、レスリーが青い顔をして立っているのが。

「ケビンが来るわ」

ドミニクにそう言うと、壁の向こうは静かになった。

「ジュリアスは、あともうちょっとだって」

「了解だ。君の命は、ジュリアス次第ってことだな。ケビンが君の前にたどり着く前にこの扉が開けば、君は助かる」

「間に合わなかったら、殺されるか、何処かに連れて行かれると思う」

「そんなことになったら」

言いかけて、ドミニクは黙ってしまった。

きっと、レスリーと同じことを思ったからだろう。二年前、同調中のパートナーを失って、全体的なことから背を向けてしまったジュリアス。また同じことが起きてしまったら、ジュリアスはどうなってしまうのだろうか。

「……頑張れ、ジュリアス。今度こそ、勝て。勝って、レスリーを救い出せ」

まるで祈るような、ドミニクの声が聞こえてくる。

「お前の力も、お前自身も、中途半端なんかじゃない。人間誰だって、完璧なんかじゃない。だから悩み、あがき、苦しみ、成長するんだ。そして、自分の半分を持っている人を探し求める。お前はようやくみつけたじゃないか。レスリーという、素晴らしい女性を。ここで失うな。人間、一人じゃ生きていけない。生きていけたとしても、味気なくて、つまらなくて、価値のない一生になるぞ、絶対だ。そうだろう？」

それは、兄として、この二年くすぶっていた弟への叱咤激励の言葉だったのだろう。同じ様にこの二年、苦しみ続けていたレスリーにとっても、その言葉は心に沁み入っていくようだった。

この二年、ケビンの本性を見抜けなかった自分を責め、恥じてきた。男を見る目がないのだから、下手に恋愛などしたら、またとんでもない男に引っかかってしまいそうで怖かった。恋をすることがとても怖かった。男性を信じられなかった。そんなの味気ない人生だって、わかってはいたけれど、どうしても心をひらくことが出来なかった。

でも今は、ジュリアスに恋をしている。彼を心から信じている。そして、彼と一緒にこの先を進むためにも、過去とは決着をつける。

（お待たせ。開くよ）

ジュリアスの声が聞こえたと同時に、レスリーとドミニクの間にある防火扉が動きだした。がこんと大きな音もして、まだ少し離れたところにいるケビンにも聞こえたようだった。ケビンは車椅子の速度を上げ、銃を取り出して手に持った。

「ドミニク、銃、持ってる？」

「しゃがんで。下から渡す」

レスリーはケビンの方を向いて膝をつくと、聞き手の右を後ろ手に、防火扉の下に押し込む。

重い防火扉は、スピーディーに動かない。じりじりとゆっくりなスピードで上がっていく。対して、ケビンの車椅子は速い。だが、スピードを限界まであげたせいで、車椅子はぐらぐらとしてかなり不安定だった。その状態で発砲しても、まず当たらない。だが、ケビンも焦っているのだろう、発砲してきた。

「レスリー！」

「大丈夫。まだ距離あるし、当たりっこない」

ようやく、銃が渡せるだけの隙間が出来る。ドミニクが押しだしてくれる銃を後ろ手に受け取ると、レスリーは膝をついたまま、銃をケビンに向かって構えた。

人に向かって銃を撃つのは、生まれて初めてだった。恐ろしくないといったら嘘になる。怖くてたまらなかった。けれど、レスリーはケビンに向かって発砲した。ケビンとの関係に、苦しいばかりの過去に、決着をつけるために。

「よくやったね」

ぽんと、肩を優しくたたかれ、レスリーは我に返った。

呆然と顔をあげると、ドミニクが目の前で優しく微笑んでいた。いつの間にか、防火扉はあがったらしい。

「ケビンは……」

「いい腕だね。右肩をきっちり撃ち抜いてる。命に別条なしってとこだ。気絶してるだけ」

のろのろと頭を巡らすと、ケビンがいたところには、大勢の人が集まっていた。見慣れない制服は、レイノックス警察だろうか。ドミニクの部下らしき男たちもいたが、遠巻きに見ているという感じだった。

どうやら、かなりの時間、呆然自失状態にあったらしい。そして、我に帰れば、体中がぎしぎしと痛んだ。

「ジュリアスは？」

「さっき船と連絡とったけど、すでに御就寝らしいよ。死んだように寝てるってさ。あ、勿論、生きてるよ」

くすりと、ドミニクは悪戯っぽく微笑む。

「ふふふ。奴は悔しいだろうな」

「え？」

なんのことかと首をかしげると、突然、地面から足が浮き、重力がおかしな感じになって、レスリーは短い悲鳴をあげた。手じかにすぎるものといえば、ドミニクの首しかなくて、思わず両手ですごってしまう。満足げな顔のドミニクに、お姫様抱っこされてしまっていた。

「あ、あの！」

「疲れただろう？ 安心して眠っていいよ。君はとてもよく頑張った。ジュリアスもね。二人とも、休憩だ」

だからって、まだ歩けるし、お姫様抱っこは恥ずかしすぎるし、きっとジュリアスは文句を言いそうだし。

抗議の言葉は、頭の中をいくつも駆け回った。だが、もう口を開くのさえもおっくうで、自分がそこまで疲れているということに、それで気がつかされた。

まあいいやと、思いなおす。ドミニクは五人兄弟の長男だけあって、甘やかすのが上手だし、抱っこされてても性的なものは感じないし、安心出来る。お兄ちゃんがいたら、こんな感じなんだろうかと思いつつ、レスリーは再び意識を失った。今度目が覚めた時は、生身のジュリアスに会いたいと、そう思いながら。